



TITLE:

世界新秩序の建設

AUTHOR(S):

柴田, 敬

CITATION:

柴田, 敬. 世界新秩序の建設. 経済論叢 1939, 49(3): 446-470

ISSUE DATE:

1939-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131296>

RIGHT:

經濟叢論 每月一日發行
第四十九卷第三號 昭和十四年九月一日發行
大正四年六月二十一日第三號郵便物認可

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第三號

昭和十四年九月

(禁轉載)

論叢

新利子論序說

文學博士 高田保馬

英國及び獨逸の所得稅

經濟學博士 汐見三郎

時論

現代日本の革新

經濟學博士 石川興二

世界新秩序の建設

經濟學博士 柴田敬

研究

史記平準書に見はれたる經濟思想

經濟學士 穗積文雄

府縣財政制度の成立

經濟學士 藤田武夫

經營比較の形態について

經濟學士 岡部利良

說苑

原料封鎖に於ける獨逸の經驗

經濟學士 大塚一朗

ドイツの「農業經濟學と農村社會學」

經濟學士 山崎武雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

世界新秩序の建設

柴田敬

序論

支那事變は東亞に永遠の平和を來すべき世界新秩序を作る爲の戦であり、其の故に聖戦である。此の聖戦目的の爲に、幾萬の尊い生命が捧げられ、幾百萬の勇士の血みどろの努力が續けられて來てゐるのである。實に此の言語に絶したる犠牲を充分に生かし聖戦の實を結ばしむる道を瞭かにする事は、學徒に課せられたる重大なる任務である。

元來東亞乃至世界の新秩序の建設と言ふやうな事は、それが事變の初期にどこまで自覺されてゐたか問題であるばかりでなく、其の事が日常の會話に於いてまで口にせられるやうになつた今日に於いてすら果してどこまで自覺されてゐるか問題であるのであるが、事變の推移は、世界新秩序の建設を口にする事を今日既に要求するに至れる如く、結局、世界新秩序の建設に向つて實踐する事を不可避にしてゐるのである。けれど、資本主義の進展につれて世界は愈々一體の構成體たる素質を持つやうになつてゐるのであり、而も今次事變は其の一體の構成體化せる世界の秩序の變革期に於ける大事變であるから、今次事變に窮局的勝利を獲る爲には、從來の世界秩序の下に於いて胎動をはじめたる新秩序の萌芽的諸力を叫合し老朽したる從來の世界秩序を衝く、と言ふ方法に従

ふ事が結局必要なのであるから。従つて我々は、在來の世界秩序が如何にして如何に舊秩序に轉落せねばならなかつたかを瞭かにし、且つ、在來の世界秩序の下に於いて新秩序の如何なる萌芽的諸力が如何に成熟して來てゐるかを検討しなければならないのである。

併し、從來の世界秩序の下に於いて胎動をはじめたる新秩序の萌芽的諸力を叫合し老朽したる從來の世界秩序を衝く、と言ふ事が如何に有效な戰術であると言ふことがわかつたとしても、如何なる國でも勝手に其の戰術を採り得ると言ふわけのものではない。それを採り得る爲には、其の爲の主觀的及び客觀的條件を具備して居なければならぬ。従つて聖戰目的を達成し得る爲には日本は此の條件を具備して居らねばならないのであるが、正に此の點に關して日本は其の國民性に照應せる命がけの飛躍を要するのであり、而も此の點に關して疑問を抱ける所論が往々にして世間に浸潤してゐるのである。従つて此の點の検討は今日特に重要なのである。

そこで我々は以下に於いて、先づ、從來の世界の秩序たる資本主義が如何に老朽して來て發展の桎梏となるに至つてゐるかを瞭にし、次に、資本主義の下に於いて次に來るべき世界の秩序の如何なる胎動があらはれてゐるかを検討し、最後に極く簡単に、其の新勢力を叫合して舊世界秩序を破るべき主觀的及び客觀的事情が今日日本を中心に如何に成熟しつゝあるかを反省しよう。

資本主義的秩序行詰論

資本主義經濟の資本主義經濟たる所以は、それが廣く團體全體の生活に如何なる影響を及ぼしてゐるかと言ふ

やうな事を第二次の問題としてたゞ個々の資本の利潤の一寸でも大である事を何よりも大事な事として活動してゐる所の人々の手に團體經濟運營の實が委ねられてゐる點にある。ヨリ常識的に之を言ひ現はせば、營利を主要目的として活動してゐる所の人々の手に團體經濟運營の實が委ねられてゐる點にある。今更でもあるまいと考へる人があるであらうが、併し今日でも依然として必要なのは、否、今日に到つて愈々必要になつて來たのは、資本主義は今日既に世界の各國民經濟運營の妨げとならざるを得なくなつてゐる、と言ふ事を知る事である。換言すれば、資本主義的秩序は舊秩序になり下つた、と言ふ事を知る事である。

資本主義行詰論に關しては極めて素描的ながらこれまで色々の機會に筆を執つたのであるから、それ等の點に關しては茲ではたゞ要約的に言及するに止め、これまで餘り言及しなかつた點をこゝではやゝ詳しく——と言つても依然として素描的なる域を脱しないが——論じようと思ふ。

資本主義的なる換言すれば營利本位的なる企業經營は、企業が分散的相互自由競争的である間は團體全體の生活にとつて有利なる結果を大體に於いて齎らし得たのであるが、やがて企業結合従つて獨占を伴はざるを得なくなり、それと共に團體全體の生活にとつて有利なる結果を大體に於いて齎らし得ざるものとなるのである。

資本主義の下に於いては各事業家は、人に先んじて生産費を切下げて餘剰利潤を獲得せんが爲乃至は少くとも生産費の切下げに於いて人に先んじられて餘剰損失を負はせられるが如き事ながら爲、生産技術の不斷の躍進を促すのであるが、それは必然的に固定資本の増大を伴ふのであり、而も固定資本の増大は、一方では生産の弾力性を減殺する事に依つて自由競争の打撃を大にし他方では同業者の數を少くする事に依つて企業結合を容易にし、更に、金融機關の産業に對する制動力と利害關係とを大にする事によつて金融機關の企業結合誘致の機會を多くし、結局企業結合——それは敢て國內に止まらず國境を超越してまで進む——を從

つて獨占資本主義を伴ふ。而も此の資本主義に内在する獨占化傾向は、世界大戰中乃至其後の經濟界混亂に依つて驚くべき程度に促進せしめられたのである。然るに完全にしろ不完全にしろ獨占化したる企業乃至企業結合は、或は直接的に、或は價格指令を通じて間接的に、生産を制限して、廣い意味の獨占利潤を、或は積極的に、或はさもなくば負擔しなければならなくなる所の損失を他に轉嫁すると言ふ仕方で消極的に、獲得しようとするのであるが、其の事は、一方では當該産業に於ける資本投下の制限を意味するが故に其の産業的需要を減少せしめる事となるが故に、他方では社會的利潤中のますます大なる部分を斯くして引き去る事に依つて其他の企業の與り得る利潤をますます僅少にするが故に、それ等の企業に投下される資本の見込利潤率を低下する。而も此事は、其等の産業への投資を壓迫し従つて其等の産業に依る産業的需要を減少せしめ、それだけ又反動的に獨占産業自體の見込利率率を壓迫する。のみならず、資本主義の獨占段階への進展は、更に、後述する如く、一方では社會的乃至國際的不安を深刻化し、他方では國際分業を阻害する傾向を有するものであるが、之等の事は、直接間接に企業の見込利潤率を壓迫する。従つて、元來資本主義の發展段階に於いては、不況が續けば金融機關の手許に資金がダブつて來るやうになり、やがて余利が充分に引下げられ低い率の見込利潤しか約束し得ないやうな事業の着手をも可能にするやうになり、景氣が出て資金が市場に流出して行くのであり、これが各種生産物の生産期間や各種生産物流通用現金所要量等に於ける異同等々の關係と相俟つて所謂景氣變動となり、又、金の生産量の變化と相俟つて所謂長期景氣波動ともなつて現はれたものであるが、資本主義が獨占段階に入つて一般的見込利潤率が右の如く低落してしまふと、銀行が如何に貸付利率を引下げて見た處で、銀行の行ひ得る程度の貸付利率引下げを以つてしては、充分に多くの事業の着手を可能にする事が非常に困難になるので生産物と生産要素と資金との過剩が、恒常的現象となり、不景氣の執拗性が頗る加はつて來、所謂景氣變動理論乃至所謂長期景氣波動理論からすれば景氣上昇を見得べき條件のある場合にも景氣上昇は容易に來らず、景氣下降を見ざる筈である場合にも早や景氣下降を見る事となるのである。

資本主義の獨占化によつて生ずる世界各國民經濟運營上の故障は、斯くの如く、一應は生産物と生産要素と資金との過剩として發現するのであるが、それは資本主義の獨占化が準戰乃至本戰の體制を誘發せざる間の事であつて、資本主義の獨占化がそれ等を誘致するやうになると資本主義に由來する國民經濟運營上の故障は却つて逆に、さらでだに存すべき生産物不足の激化として發現するやうになる。けだし、資本主義の獨占化は、後述の如

く、國際不安の激化従つて準戰乃至本戰の體制を誘致する事になるのであるが、斯くなれば各國とも直接的乃至間接的の莫大な軍需に應じきれなくなり、物の不足を痛感する事となるのであるが、資本主義の下に於いては物の不足に因る物價騰貴の兆候は却つて物の買溜め賣惜しみを促進し、資本主義的經營の業務祕密保有の要求は徹底的なる物資國勢調査會計調査等々を従つてそれを俟つてはじめて立てらるべき徹底的なる計畫的生産を妨げ、又、資本家的打算乃至掛引は必要物資生産の充分且迅速なる擴充を妨げるのであり、斯くして物の不足は愈々激化される事となるのであるから。

我々は右に於いて、獨占資本主義段階に深入りするに従つて各國國民經濟従つて世界經濟の不安が如何に甚だしくなるかを主として所謂經濟の側面に就いて見たのであるが、此の事は同時に社會的、政治的側面の問題を持つてゐるのであり、資本主義的秩序の舊秩序化は此の點に於いて最も端的にあらはれるのである。

先づ國民經濟内部の事情に就いて考察しよう。

資本主義の獨占化によつて團體經濟運營が如何に動脈硬化症に悩むやうになるかを吾々は右に於いて考察したのであるが、此の動脈硬化は何よりも先づ生産活動の萎縮を伴ふものであるが故に、生産諸要素の放置従つて失業の増加及び恒久化を伴はずには居れない。而も資本の獨占化は其の上に更に、投下資本一定額當りの雇傭労働者數を減少せしめる所の固定資本の増加、即ち所謂資本組成の有機的高級化、を伴ふのである。けだし、獨占資本は一方では獨占資本下で激化される所の労働運動に對抗する爲にヨリ多く機械を用ふる如き生産方法に資本家をして走らしめ他方では又合理化運動の遂行を可能にするものであるから。従つて、元來資本主義の進展に連れて常に問題を起して來た所の有機的資本組成高級化に因る失業は、獨占資本主義段階に入つて愈々決定的とならざるを得ない。然るに失業の激増と恒久化とは、因となり果となつて、労働運動を刺激し組織化し尖鋭化する。労働運動は斯くしてますます政治化する。此の事は資本を刺激し其の自己擁護運動を政治化せしめる。加之、元來固定資本が増大し資本主義が

獨占段階に深入りするに連れて、事業の創設乃至繼續擴張に就いて金融機關の協力に俟つ必要が増加するのであるが、其の事は同時に、産業經營に對する金融機關の及び群小金融機關に對する小數大金融機關の制覇の増加を伴はずには置かない。斯くして國民經濟の運営は次第に小數の大金融機關に依つて、從つて其等の小數の大金融機關を支配せる小數の大資本家によつて、支配されるやうになるのであり、從つて、資本の自己擁護運動はますます組織化され從つて政治化され國家機關をも其の爲の傀儡となすやうにすらなる。而も此の事は又因となり果となつて勞働運動の政治化を促進し、國家機關の資本主義的傀儡化が深入りすればするほど勞働の對資本家抗爭を對國家機關抗爭に轉化せしめ、勞働運動に革命的色彩を帶びしめる。此の傾向は、ロシアに於ける革命の成功によつて愈々拍車をかけられたのである。

資本主義の獨占化によつて生ずる各國の社會的政治的不安は、斯くの如く、一應は早期爆發性の革命的勞働運動と言ふ形を採るのであるが、それは資本主義の獨占化に因る各國の社會的政治的不安が其れの除去の爲の國家機關の全面的權力的干涉を誘發せざる間の事であつて、資本主義の獨占化に因る社會的政治的不安が國家機關を促してその除去の爲に全面的權力的干涉をなすべく立ち上らしめるやうになると、資本主義に由來する社會的政治的不安は却つて長期内政性の革命的大衆運動となるやうになる。

けだし、一方では、資本主義の獨占化に因る社會的政治的不安が國民團體生活の一體性を危殆に瀕せしめるものであるが故に、殊に後述の如く獨占資本主義の進展に連れて生ずる處の國際政局不安の下に於いては右の危險が愈々大となり更には國民的團結の力を以つてする發展の必要が愈々緊切となるが故に、資本主義の獨占化に因つて社會的政治的不安が深刻化するに連れて、殊にそれと關聯して國際政局の不安が激しくなるに連れて、國民的危險を除き國民的發展を期せんとする純眞なる意圖から國民主義運動に走る者が愈々多くなる。他方では、資本主義の獨占化に因る社會的政治的不安が資本家の身邊及び資本の利殖を危殆に瀕せしめるものであるが故に、

殊に國民的團結を以つてする海外發展の過程及び結果が何れもそれを資本の利益に轉化する機會を與ふるものであるが故に、資本を脅かせる危險を除き資本の利益を確保する爲にそれを利用せんとする不純なる意圖から國民主義運動を誘致する事が、資本主義の獨占化するに連れて、次第に強く行はれるやうになる。斯くして、獨占資本主義の深化につれて社會的政治的不安深刻化の傾向が強くなるに連れて、殊にそれと關聯して國際政局の不安が激しくなるに連れて、國民主義運動は愈々強力となり愈々本格的となるのであるが、それはその本質上大衆の階級闘争を斷壓乃至排除するものである。然るに獨占資本主義の深化につれて殊にそれと關聯して國民主義運動が本格的となるに連れて、後述の如く、國際政局の不安は深刻さを増し、準戰體制へ本戰體制へと時局は推移するのであるが、さうなると、何れの當事國にとつても其の危機を乗り切る事によつて到達し得べき境地と乗り切り得ずして陥るべきそれとの間の懸隔が非常に大きくなるので、中途半端な解決は愈々不可能になり、各國とも其の總力を舉げて事に當る事を餘儀なくされるやうになる。さうなると、國民生活に對する壓迫の加重は不可避となり戰線及び銃後に於ける國民の負擔は増加して來るのであるが、それにつれて國民は負擔の公正に關して愈々敏感になるのである。而も時局の推移と密接なる關聯を以つて進展する所の國民主義運動は此の點に關する國民の不平の發現を益々強く拒否乃至排除するのである。従つて、社會的政治的不安は早期爆發性のものとならずに長期内攻性のものとなつて深く々々浸潤して行く傾向を持つのである。然るに正に斯くの如く早期爆發を妨げられたる事情の下に於いて、社會的政治的不安が進展する事を資本主義は餘儀なくするのである。けだし、前述の如く、時局の推移と共に、一方では國民が益々負擔の公正の問題に敏感になるのに、他方では、資本主義の

下に於いては、買溜め賣惜しみ乃至資本家的打算掛引の爲の生産擴充怠慢が横行し、時局を喰ひ物にした權益漁りポロ儲が風をなし、負擔の不公平が愈々蔽ひ難きものとならざるを得ないのであるから。

我々は右に於いて、獨占段階に深入りするに従つて資本主義が如何にそれぞれの國民團體の內的團結の障礙となり國民的發展の桎梏となるかを見たのであるから、次に、世界政局の推移に對する獨占資本の作用を瞥見しよう。

元來資本主義は交換的原理に基づく對外進出を可能にし實踐しつゝ世界を征伐したものである。勿論資本主義の發展期に於いても武力が用ゐられなかつたわけでは決して無く、後進國に對する交渉に際しては殊に武力を背景とする威喝が重要な役割を果したのではあるが、資本主義の世界征伐が斯くも深く廣く徹底し得たのは、それが單に武力だけによらず交換的原理に主として従つた事に由來するのである。資本主義の下に於ける生産力の發達は實に此の交換的原理に基づく世界征伐を可能にし有利にしてゐたのである。

然るに資本主義の進展につれて、資本主義の進出はますます多く武力的原理に依る事を餘儀なくされるに至る。けだし、先づ、先進資本主義國が交換的原理に従つて進出する事を利益と爲し得たのはそれが後進國に比して遙かに進みたる生産技術及び設備を具有してゐたからであるが、資本主義の進展につれて後進國の生産技術も漸く進み次第に多くの國が資本主義化する。従つて先進國は、それが嘗て後進國に比して遙に進みたる生産技術乃至設備を具有する事に依つて享受し得てゐた所の特別利益を保持し得んが爲には、他國の資本主義的進出を妨害するの舉に出でねばならず、さうなると後進國も亦それに應じたる態度を採らねばならぬ。斯くして次第に交

換的原理による對外交渉に比して武力的原理によるものが擡頭して来る。此の事は、開拓せらるべき非資本主義的地域がなくなるにつれて、益々甚だしくなる。加之、資本主義はそれが進むに連れて、曩に述べたる如く、獨占化し動脈硬化症に悩むやうになるのであるが、さうなると過剰生産物乃至過剰資本の捌口の爲に植民地が要望されるやうになり、其の要望の達成の爲に武力的原理に依頼する事が次第に多くなる。此の事は、一方では植民地化され得る餘地が少くなるにつれて、他方では植民地民族の反抗が強くなるにつれて、愈々拍車される。のみならず、斯かる狀勢が進展するにつれて、國防産業の基礎の確立——それは戰爭技術の進歩の結果益々廣大なる地域を前提するやうになる——が各國にとつて愈々緊急事となり、殊に所謂持たざる國に於いてそれが痛感される事になる。此の事はそれ等の國を驅つて愈々強く武力的原理に従はしめる。而も其の事は其他の國を刺戟し、所謂持てる國を驅つて豪然として立ち上らしめる。而も斯うした動向は更に、一方では、國民の關心を外に轉ずる事に依つて國內の社會的政治的不安を揉み消さんとする一部の努力や、さも無ければ過剰設備に陥るであらう重工業に軍需増加に依る殷賑を齎さんとする一部の策動やによつて、他方では、世界革命乃至自國權益擁護伸張等を目ざす國々に依つて行はれる使喚、策謀によつて、愈々切迫したるものとされる。斯くして國際政局は愈々不安となり、武力的原理は愈々支配的となる。

然るに正に此の武力的原理による實踐の遂行にとつて資本主義はたえ難き桎梏となるのである。何となれば、曩に述べたる如く、資本主義は國際的政局不安の激化を伴ふ如き事情の下に於いて國民經濟の運營の妨げとなり國內の社會的政治的不安の深刻化を生ぜしめるものであるが、正にそれ等のものは國家の對外的武力を蝕む

重大禍根であるから。

それのみでない。資本主義の進展につれて世界は愈々一體的構成體たる素質を持つやうになり一部局に於ける事件も全世界と關聯を有するやうになるのである。従つて、此の世界の推移と緊密なる關聯を持つて進展して行く處の國際政局不安を乗り切る爲には何れの國も世界を相手として事に處する事を愈々要請されるやうになるのである。斯うした事情の下に於いては、敵國の國民を我に悦伏せしめるが如き戰法に依る事が愈々必要とならざるを得ない。而も敵國の國民を化して我が味方たらしめ得る爲には、道義に立たねばならぬ。けだし、「我ニ道義ヲ立テ、義旗ヲフルイ、天應ジ人順、上下能ク一志ニシテ、其道義ヲ以テカレガ心ヲ感ゼシムル時ハ、彼自ヲ屈ス、タトヘ彼ガ主將タテヲツクト云ドモ、其國ノ人民、皆ホコヲ倒ニシテ、自ラノ主ニ敵シテ味方ニ降參スベシ」であるから。併し道義と言つても、主觀的なもの偏狹なものであつてはならぬ。それに立つ事によつて敵國の國民を化して我が味方たらしめ得るが如き道義は、敵國の國民に妥當性を有する従つて敵國の國民がそれ自身その爲に血を湧かし肉を躍らせる所のものであらねばならぬ。廣く言へば、世界的時代的原理を含んだものであらねばならぬ。斯くの如き生きたる道義、原理は、今日に於いては、帝國主義的搾取の下に呻吟せる植民地有色民族を其の植民地的慘狀より解放する所のものであらねばならないし、獨占資本主義的重壓の下に懊惱せる各國民大衆を其の窮狀より救出する所のものであらねばならぬ。斯くの如き原理道義に立つ時に我々はじめて敵國の國民を我に悦伏せしめる事が出来るやうになるのであり、斯くする事によつて我々はじめて此の國際政局不安を乗り切つて世界的大業を遂行する事が出来るやうになるのである。然るに正に斯くの如き道義、原理に立つ

事に對して資本主義は根本的な妨げとなるのである。何となれば資本主義こそは上述の如く帝國主義、獨占資本主義の根本原因なのであるから。

世界新秩序萌芽論

前節に於いて我々は、在來の世界秩序、資本主義的世界秩序が如何にして如何に舊秩序に轉落せねばならなかつたかを概説したのである。従つて、これから、資本主義的世界秩序の下に於いて新秩序の如何なる萌芽的諸力が如何に成熟して來てゐるかを検討しよう。

資本主義的世界秩序の下に於いて形成されて來てゐる所の新秩序の萌芽的諸力は之を大別して二とする事が出来る。第一は新秩序建設に際しての素材となるものであり、第二は新秩序建設活動の擔當者となるものである。前者は素材因、後者は動力因と呼ぶ事が出来る。

先づ新秩序の素材因に就いて考察しようと思ふのであるが、それはそれ自體更に、經營組織的素材因、物的素材因、及び人的素材因の三つに分類され得る。以下順次これを考究しよう。

資本主義的國民經濟は元來相互に獨立せる意志に依つて運營される無數の小規模經營の活動を通じて無政府的に運營せられるものとされるのであるが、資本主義の發展につれて既述の如く固定資本が増大し所謂資本組成の有機的高級化を來すに従つて、殊にそれに依つて企業結合が誘致されるに従つて、資本主義的國民經濟は次第に大なる統一意志的運營體を其の構成單位として有するやうになり、それを通じて資本主義的國民經濟それ自體が

極めて偏面的且歪曲的ながら統一意志的に運営せられるやうになる。(曩に論及されたる金融資本による國民經濟の寡頭支配は其の典型的なるものである)。併しそれだけでない。獨占資本主義を表徴する其等の構成體は、曩に述べたる如く、先づ資本主義の運行を難澁にし資本主義國してを社會的政治的不安に悩むに至らしめるものであるが故に、資本主義の運行を圓滑ならしめる爲にも、國民大衆の生活不安を排除く爲にも、將又、國民團體の團結を確保する爲にも、獨占資本主義の進展につれて、國家による購買力補給と言ふ事が益々必要になるのであるが、斯くの如くして社會的總需要中に占める國家需要の割合が不可避免的に増加するに連れて、國民經濟の運営に對する國家の支配は増加する。斯くして、獨占資本主義の進展につれて、國民經濟は次第に國家的統一意志的に運営せられる面を増して來る。併し事情はそれでは盡きない。曩に述べたる如く、獨占資本主義の進展につれて國際政局の不安は深刻化し時局は準戰時代へ本戰時代へと進むのであるが、斯かる事態に立ち到ると、其の危機を乗り切る事によつて到達し得らるべき境地と乗り切り得ずして陥るべきそれとの間の懸隔が非常に大きくなるので中途半端な解決は不可能になり、各國とも必死の勢で軍擴に没頭するやうになるのであるが、其の事は今日の戰爭技術上國民經濟の凡ゆる部分の運営を國家的統一意志的に且つ益々多く國家自ら行ふ事を不可避にするのである。各國は此の事の有効性をロシヤの先例によつて教へられ、時局の急務に驅られて體得させられるのである。

斯くの如く獨占資本主義の進展につれて國民經濟は次第に大なる組織の經營を其の構成單位として有するやうになるのみならずそれ自體一つの經營たるの性格を次第に多く有するやうになるのであるが、而して此の傾向は

資本主義の獨占化乃至獨占資本主義の進展を必然ならしめてゐる根本原因が存續し發展し續けてゐる限り之を堰き止め得べきものではないのであるが、而も此の傾向の徹底は他ならぬ資本主義其のものによつて妨げられてゐるのもある。

國民經濟がそれ自體一つの經營たるの性格を次第に多く有するやうになるに連れて、換言すれば國民經濟の國家統制經濟化の過程が進むにつれて、私的營利活動は益々制肘を受ける事になる。従つて、資本主義の下に於いて既得權益を有するものは、國民經濟の國家統制經濟化にあらゆる手段をつくして抵抗を試みるのであつて、此の抵抗は國民經濟の國家統制經濟化の過程が愈々進展して獨占資本主義の中核に迫るやうになるに従つて愈々熾烈となるのである。斯くして、國民經濟の國家統制經濟化は、資本主義の進展につれて益々不可避的となるにも拘はらず、其れが時勢の要求に驅られて進めば進むほど益々多くの資本主義的障礙と戰はねばならないのである。即ち例へば、資本主義の進展につれて國民經濟全體の統一的計畫的運營の必要が如何に加はつて來るかと言ふ事を我々は曩に論じたのであるが、此の國民經濟全體の統一的計畫的運營は、資本主義の下では、一方ではその前提條件である所の物資國勢調査會計調査等々が資本主義的經營の業務祕密保有の要求に妨げられて充分に徹底的に行はれ得ないが故に、他方では、資本主義的經營が國家の一機關の如く純國家的に行動せず私的打算乃至掛引に囚はれざるを得ないものであるが故に、極めて不充分にしか行はれ得ないのである。

斯くの如く國民經濟の國家統制經濟化は其の徹底を他ならぬ資本主義其のものによつて妨げられるのではあるが、而も、獨占資本主義の進展は曩に述べたる如く國民經濟の構成單位としての各種經營の大規模化乃至國民經

濟自體の一大規模經營化を不可避にしてゐるのである。實に資本主義の進展につれて斯くして不可避的に將來される所の大規模經營こそは、それを俟つてはじめて新秩序の建設し得らるべき、又、新秩序の下に於いてはじめて充分に發展し其の全機能を發揮し得るに至るべき經營組織的素材であるのである。

資本主義の下に於いて生産資材乃至生産設備は未曾有の大集積を見たのであり、資本主義獨占化の過程が進むにつれて時局が準戰時代へ本戰時代へと推移するに従つて、重工業上の生産資材乃至生産設備は飛躍的擴充を見ねばならなかつたのであり今後も尙ほますますそれを見ねばならないのである。生産資材乃至生産設備の、殊に重工業上のそれ等の、此の巨大なる集積擴充は、世界各國が準戰乃至本戰體制を採るに至らざる以前に於いて既に、資本主義的には充分に利用しつくし難かりしものであり、世界的大恐慌の一原因たりしものである。従つて、現在のところ國際政局の暗雲の故に其の事が蔽はれてはゐるものの、若しいつの日にか此の暗雲の晴れる事があるならば、此の暗雲に促されていやが上にも擴充された重工業的生產資材乃至生産設備の集積は、資本主義的には逆も利用さるべくもなきもの、従つて資本主義の生命とりの大恐慌を呼び起すもの、である事を冷酷に曝露する筈である。實に此の懸念の故に、一部の資本家は今日既に懼れをなして重工業のこれ以上の擴充に熱意を持たなくなつてゐる。けれども時局の火急の必要はそのやうな怠業を許さない。従つて、重工業的生產資材乃至生産設備の擴充は問題を孕みつくも不可避的に進捗せねばならない。實にこの、資本主義の下では利用し得られざる所の、従つて資本主義の下ではその増加に對して色々な障礙物が存在してゐる所の、而も資本主義の下に於いて不可避的に増加する所の、巨大なる重工業的生產資材乃至生産設備の集積こそは、それを俟つてはじめて

新秩序の建設し得らるべき、又、新秩序の下に於いてはじめて充分に發展し其の機能を充分に發揮し得るに至るべき、物的素材であるのである。

資本主義は曩に述べたる如く不可避免的に生産技術の飛躍的發展を促進するものであつて、此の技術的發展は、獨占資本主義の進展につれて國際政局不安が深刻化するにつれて、世界的危機乗切の必要と言ふ特殊の拍車を得て愈々特殊の方向に進むやうになる。然るに、生産技術の進歩はそれが愈々進むにつれて、一方では、それ自體營利本位的立場からは企て難き、又資本主義的教育を以つてしては其の爲の人材を充分に得がたき、ますます大規模の實驗研究を必要とするやうになり、他方では、その新採用に際しますます大なる既設生産設備に投下されたる資本の利益と衝突し其の反抗に遭ふやうになるのみならず、その利用がますます多く労働者の自覺的自發的參與を必要とするやうになるが故に資本主義的労働者待遇と相容れざるやうになる。従つて、獨占資本主義の進展につれて生産技術の進歩に對する障礙は増加し、進歩せる生産技術の利用は益々妨げられるやうになる。實にこの、資本主義の下では充分に利用し得られざる所の、又充分に發達し得ざる所の、而も資本主義の下に於いて不可避免的に發達する所の、進みたる生産技能こそは、それを俟つてはじめて新秩序の建設し得らるべき、又、新秩序の下に於いてはじめて充分に發達し其の機能を充分に發揮し得るに至るべき、人的素材であるのである。

斯くの如くそれを俟つてはじめて新秩序の建設し得らるべき且つ新秩序に到つてはじめて充分に其の機能を發揮し得るに到るべき素材が資本主義的秩序の下に於いて不可避免的に形成されてゐるのであるが、併しそれだけの事で新秩序が將來されるわけのものではない。新秩序が將來され得る爲には、新秩序建設活動の擔當者となるも

のが舊秩序の下に於いて仕立てられて居らねばならない。即ち、動力因が既に胎動し出して居らねばならない。

新秩序建設の動力因たる所のは、それ自體更に二つに大別され得る。一は指導的動力因であり、二は被指導的動力因である。被指導的動力因は指導的動力因に對して、素材的關係に立つのである。指導的動力因被指導的動力因の區別は絶對的のものでなく色々の斷面に就いて之を考へ得るのであるが、當面の問題として特に重要なのは、資本主義的秩序の行詰りと必然的な關聯を持つて出て來た所の國民主義運動が指導的動力因たり得るか、と言ふ事である。之を裏から言へば、資本主義的秩序の行詰りと必然的な關係を持つて出て來た所の勞働階級運動が指導的動力因でなくて済むか、と言ふ事である。

曩に述べたる如く、資本主義的秩序の行詰りに連れて國際的國內的の政治的社會的不安が深刻化するに従つて國民主義運動は愈々強力となり愈々本格的となるのであるが、それは必ずしも純眞なる意圖に出づるもののみでなく、不純なる意圖に出づるものを多分に含んであるのであり、又、次第に強化されると言つても兎角組織上の缺陷——それは國民主義運動が純化されてゐない事に主として由來する——の故に充分には強化されてゐないのである。而して正にさうであるが故に國民主義運動は、資本主義を自覺的合理的に變革するどころか却つて資本主義に由來する社會的政治的不安を深刻化し大衆運動を長期内攻性革命運動に轉化せしめ、又、相手國民殊に有色諸民族を惹きつけるどころが却つて反抗的敵對的ならしめる事になるのであり、従つて、新秩序建設の指導的動力因としての資格を疑はれる事になるのである。

國民主義運動が若し結局純化し強化し得ぬならば、新秩序建設の指導的動力因としての役割は勞働者階級運動

によつて果される他なくなるであらうし、従つて、新秩序の建設は革命的形態を採る他ないであらう。併しながら、國民主義運動は所詮純化し得ない、と言ふ必然性は何處にもないのである。國民主義運動は、かりにそれが何等かの階級的利益の爲に利用すべく呼び出されたものである——實は全面的には決してさうでないが——としても、一度呼び出されるや否やそれはそれ自身自覺を高め力を増しつゝ發展するものであり、利用者自體をも批判するに至り得るものである。のみならず、曩に述べたる如く時局の推移につれて資本主義は益々國民經濟の運営を難澁にし國民的團結の根底を蝕み國民を對外關係に於いて危地に陥入れる事になるのであるが此の事は、國民主義運動の純化を促す警鐘として作用するのである。

資本主義の行詰りにつれて、一方では斯くの如く國民主義運動が愈々強力となり、本格的となり純眞となるのであるが、他方では既述の如く顯在的乃至潜在的の勞働者階級運動が愈々底力を増し又被壓迫有色民族の自己解放運動が益々熾烈さを加へて來るのである。之等の勞働者階級運動及び被壓迫民族自己解放運動は、國民主義運動が充分に強力となり且つ天下億兆一人も其處を得ざる勿らしむる事に萬人全力を致す正しき意味に於ける共同體主義運動に純化されるならば、斯かる國民主義運動によつて純化され包攝されて被指導的動力因として新秩序の建設に參與する事になるであらう。併し此の事が行はれ得る爲には國民主義運動が飽くまで充分に強力となり且つ正しき意味に於ける共同體主義運動に純化されてゐる事が絶対に必要なのであつて、若し此の純化強化が行はれ得ないならば、國民主義運動は小供の火遊びにも等しきものとなり革命運動を却つて深刻化し激化する事になるであらう。勿論國民主義運動の純化強化と言つた所で即日に行はれるものではないのであり、従つて長期限内

攻性の革命的大衆運動をも伴ひながら行はれるのである。問題は、従つて、たとへ時には反動があるとしても結局國民主義運動の純化強化の進行の方が國民主義運動の不純部分に起因する革命的大衆運動の進行に打ち勝つか、それとも、相當に強化されたる國民主義運動の下に於いてはたとへ革命的大衆運動があつても長期内攻性のものとなつて早期爆發をなし得ないと言ふ事に迷はされて國民主義運動の純化強化の爲に充分なる努力を手遅れせぬうちに爲す事が怠られて、國民主義運動の純化強化の進行の方が國民主義運動の不純部分に起因する革命的大衆運動の進行に依つて益々打負されて遂に收拾出來ぬ程度になるか、に存するのである。其の何れとなるかは國民性の如何により當路者の態度により又其他色々の事情により決せられるであらう。

世界新秩序建設論

以上に於いて我々は、資本主義的世界秩序が如何にして如何に舊秩序に轉落せねばならなかつたか、資本主義的世界秩序の下に於いて新秩序の如何なる萌芽的諸力が如何にして形成されねばならなくされて來るかを概説したのであるが、東亞新秩序を建設する爲には正に其等の萌芽的諸力を叫合し斯くの如く舊秩序化したる資本主義を衝くと言ふ方法に従らねばならないのである。けだし世界は資本主義の進展につれて愈々一體的構成體たる素質を持つやうになり一地方に於ける事件も全世界と密接なる關聯を有するやうになつてゐるのだから。従つて、東亞に永遠の平和を約束する新秩序を齎らすと言ふが如き大事業を遂行する爲には、結局、全世界を相手として事に處する用意が必要となるのであり、従つて世界新秩序の建設に向つて實踐すると言ふ方法に依る事が必要と

なるのであり、従つて右に展開されたる新秩序の萌芽的諸力を叫合して資本主義的世界秩序を衝くと言ふ方法に依る事が必要となるのである。

併し、資本主義的世界舊秩序の下に於いて胎動をはじめたる新秩序の萌芽的諸力を叫合して其の舊秩序を衝くと言ふが如き事は、言ふは易けれども實行は中々容易でないのである。其の爲には主觀的並びに客觀的な條件を具備する事が必要なのである。然らば日本は其等の條件を具備してゐるであらうか。

先づ客觀的條件を、即ち、四圍の事情が世界變革の日本による指導を可能にしてゐるかを、考察しよう。此の點に關して何よりも先づ指摘せらるべきは、獨占資本主義殊に其の帝國主義面の進展につれて愈々自覺を高め自己解放運動を強くして來た所の被壓迫諸民族は凡て日本人と同じく有色人種であり、殊に日本の位置してゐる所の亞細亞は反帝國主義的民族運動の渦まきの中心をなしてゐる、と言ふ事である。次に指摘せらるべきは、一方では曩に述べられたるが如き資本主義的秩序の行詰りの進展につれて資本主義的支配的歐米白人諸國殊に其の代表的なる英國が其の國民經濟運営上の故障や社會的政治的不安の深刻化や國際政局不安の重大化やに悩まされて外部に對する迫力を屯に失墜し、他方では唯物主義的黨派主義的原理に従つて資本主義を未だ機熟せざるうちに強行軍的に且つ革命的陰謀的に顛覆する事に成功して世界新秩序建設の動力因たる諸層の同情と尊敬と共鳴とを廣く世界的に喚起したるソ聯が正に其の唯物主義的黨派主義的早計的革命的陰謀的變革——それは其の國民性に深く根ざせるものであるが——の故に益々社會的政治的不安の深刻化に悩まされて外部に對する迫力と外部よりの信望とを失ふに至つてゐる、と言ふ事である。之等の事は、日本が世界の被壓迫諸民族の自己解放運動の殊に

亞細亞の反帝國主義的民族運動の擁護者乃至盟主として立つ事を、可能にすると共に要請してもゐるのである。

次に主觀的條件を、即ち、世界變革の指導者として立つ爲の基礎を日本自體が持つてゐるかを、考察しよう。

此の點に關して何よりも先づ指摘せらるべきは、すべてのものを受け容れて其の處を得しめつゝ之を保持發展せしめると言ふ共同體的特質を日本の國民性が顯著に持つてゐる事である。此の事は日本が世界の凡ゆる優秀文化を受け容れて其等を其の母國に於いて其等が既に死滅したる後に於いてすら特殊の仕方で綜合しつゝ保持發展せしめて來てゐると言ふ點にもあらはれてゐるし、又殊に、日本が元來數多くの人種より成りつゝ天皇を中心とする特殊の國民共同體にまでそれを融合し保持し發展せしめて來てゐると言ふ點にあらはれてゐる。此の共同體的國民性は、世界の被壓迫諸民族の自己解放運動殊に亞細亞の反帝國主義的民族運動の擁護者たらんとする國民にとつては不可缺の條件である。日本は實に此の貴重なる國民性を顯著に持つてゐるのである。次に指摘せらるべきは、日本が歐米諸國を相手として戦ひ得べき武力を持ち、又其の武力戰を支へるべき高度經濟力を微弱ながら確立し得てゐる事である。

斯くの如く考へ來るならば、日本こそは世界新秩序の建設者たるの役割を果すべく使命づけられてゐる國である、日本が世界新秩序の建設に向つて實踐する事によつて東亞に永遠の平和を齎らす事は單に可能ばかりでなく必至でもある、従つて聖戰の目的達成は必定である、と言ふ結論が容易に導き出される筈である。併し實はさう簡單には行かないのである。

我々は右に於いて日本が世界新秩序建設の指導國たり得べく具備してゐる所の客觀的條件の主要なる一つとし

て、獨占資本主義殊に其の帝國主義面の進展につれて愈々自覺を高め自己解放運動を強くして來た所の被壓迫諸民族は凡て日本人と同じく有色人種であり殊に日本が其處に在る所の其の亞細亞は反帝國主義的民族運動の渦まきの中心をなしてゐる、と言ふ事を掲げたのであるが、此の世界の殊に亞細亞の有色諸民族は、現實に於いては日本を指導者と仰ぎ日本の聖戰に共鳴して立ち上るところか却つて日本を敵視し直接間接日本に敵對行爲をなしてゐるのである。又、我々は右に於いて日本が世界新秩序建設の指導國たり得べく具備してゐる所の主觀的條件の一つとして、日本が對歐米諸國武力戰に堪へ得る高度經濟力を微弱ながら確立し得てゐる事を掲げたのであるが、現實に於いては今日既に、闇相場が騰貴し外貨が次第に涸渇し日本の經濟力に就いての不安感を深めしめてゐるのである。斯くして聖戰目的の遂行は愈々難路にさしかゝつて來てゐるのである。然らば此の矛盾はそもそも何に由來するか。

勿論、世界の殊に亞細亞の有色諸民族が日本に共鳴して立ち上るところか却つて日本に直接間接敵對行爲を爲すに到つてゐると言ふ事は支那指導者の短慮及び英ソ其他の使噓、後援に由來する所大ではあるが、若し日本が諸民族を受け容れ其の處を得しめつゝ之を保持發展せしめる所の共同體的國民性を顯著に有せる事を彼等に充分に徹底せしめ得てゐたならば、英ソ其他の使噓、後援の如きは效を奏せざりし筈である。而も事ここゝに到りし所以のものは、日本が眞に日本的なるものに非ざるものを、即ち帝國主義的なるものを、充分に清算し得て居らないからに他ならぬ。人或は言ふ。帝國主義は、一、對外投資を必要とする過剩資本、二、金融寡頭政治、三、相手國の政治的支配の存在を前提するのであるが、(一)、日本の對外投資は日本自體の外資輸入を相殺する程度に過

ぎず殊に今次事變勃發の頃には好景氣の爲め又其後は事變關係の爲め資本は却つて不足してゐたのであり、(二)、國政を支配するが如き金融寡頭は存在せず殊に滿洲事變も今次事變も資本家に依つて乃至は其の利益の爲に踏み込まれたるものでは決して無く却つて非資本家的勢力に依つて資本家の利益に抗して踏み込まれたるものであり(三)、滿洲乃至支那に總督政治を行ふのでないからそれ等に對する政治的支配は存在しない、従つて日本の行動には帝國主義的なものは含まれてゐない、と。併しながらこれは詭辯に過ぎない。何となれば、今かりに右の三點で帝國主義か否かの判定をする事が許されるとしても、一、大體に於いて之を見るならば、昭和四年以降は、日本の年々の對外投資は其の年々の外資輸入を超過し、日本の年々の外資返却高は其の年々の外資輸入高を超過し、又、日本の年々の對外投資は其の年々の海外投資回收を超過してゐるのであつて、日本が其の頃から對外投資時代に入つた事は瞭らかであるし、又、好況時乃至戰時には如何に典型的なる帝國主義國と雖も資本不足に悩むのであつて、此の意味に於ける資本不足があるからと言つて帝國主義論的資本過剰なしとは決して言ひ得ないのであり、二、金融寡頭が日本の國政に重要な發言權を事實上有してゐる事は餘りにも周知の事實であり、又、如何にも滿洲事變も今次事變も資本家に依つて乃至は其の利益の爲に踏み込まれたと言ふよりも寧ろ却つて非資本家的勢力に依つて資本家の利益に抗して踏み込まれたと考ふべき事情を多々具へてゐるのではあるが、それにもかゝはらず時が経つにつれてうつかりすると「金融資本入るべからず」と豪語せる勢力をして「金融資本の援助を乞ふ」ものたらしめる如き力が支配してゐる事は歴然たる事實であり、三、總督政治の有無によつて政治的支配の有無を判するが如きは兒戯に等しいのであるから。如何に詭辯を弄しやうとも、日本がまだ眞に日本

的なるものになりきつてゐない事は、即ち、獨占資本主義的、金融資本主義的、帝國主義的なるものを充分に清算し得てゐない事は、否定すべくもない現實である。此の事あるが故に、折角の皇軍の血みどろの活躍にも拘はらず其の眞意は中々徹底され得ないのであり、東亞諸民族は英ソ其他の使族に躍る事になるのである。斯くては、反帝國主義的に段々激化して來る東亞諸民族運動を動員して西歐帝國主義を破り東亞新秩序を建設すると言ふが如きは逆も覺えないのである。

次に日本の經濟力に就いて之を見ても同様である。もともと十二分な經濟的基礎があるわけではなく、せいぜい必要最低限度に足る程度のものである。それなのに、其の貴重なる經濟力を共同體的に最も效果的に利用しようとする努力が徹底し得ずして、資本主義が横行し、買溜め賣惜しみ乃至資本家的打算掛引の爲の生産擴充怠慢が續出し、時局を喰ひ物にした權益漁りボロ儲が風をなしてゐるのである。斯くては日本の經濟力に就いての不安は之を除かんとするも能はざるに至らざるを得ないのである。

斯く考へ來るならば、事變の爲の言語に絶したる犠牲を充分に生かし聖戰の實を結ばしめ日本をして今後愈々激化すべき世界的危機に處して大山の安きに居らめ其の世界史的大使命を果すを得しめんが爲には我々は今日の日本を革新し眞に日本的なる姿に速に立ち歸らしめねばならぬ、と言ふ事は之を疑ふを得ないのである。

或人は言ふ。革新は生産力を傷づけ社會的動搖を生ぜしめる懼れがあるから事變中に手を染むべきではなく事變終結の日まで繰延べるべきであると。又或人は言ふ。革新を必要とするが如き事情があると言ふ事は可及的隱蔽すべきであると。之等の論者は如何にも國家の安泰を念願するの餘り之等の論をなすでもあらうが、其の論ず

る所は、併しながら、國家を却つて危地に陥入れるものである。何となれば、資本主義こそは正に現に生産力を傷け經濟力の效果的利用を妨げ社會的不安を内攻せしめ支那民衆を不必要に抗日に驅り立て其他の東亞諸民族を不必要に日本から離反せしめ以つて聖戰目的の達成を困難ならしめつゝある痛であり、其の痛の病毒は之を如何に詭辯の膏藥で塗りつぶして見た所で世界的危機の進行につれて日本を愈々危地に陥入れるべく作用せずにはをかないのであるから、臆病心に災されたり膏藥療法に迷はされたりして、手遅れせぬうちに此の痛を剔出する事に反對する事は、結局日本を窮地に陥入れる事になるのであるから。國際的危機の最中に於いて明治維新を敢行して事に處したればこそ當時の國際的危機を日本は乗り切り得たのであつて、若し彼の時國際的危機に藉口して國內革新を怠つてゐたとするならば日本は今日如何なる有様になつてゐるであらうか。此の事を反省し得る程の人であるならば、今日革新の急務なる所以を否定し得ない筈である。

斯くの如く日本的革新の要は愈々急なるものがあるのであるが、併し、革新が行はれ得る爲には其の條件——と言つても茲で特に問題になるのは就中動力因であるが——が準備されて居らねばならない。若しそれが無いならば革新を叫ぶのは單なる象牙塔上の空吠えに過ぎないであらう。實際、日本的革新を遂行するが如き有力なる動力因は何處にも見當らないのだから乍遺憾日本も亦公式通りに推移する他ないのである、と言ふやうな見解を持つた人は随分多い。殊に社會科學徒の間に於いてさうである。而して其の見解を裏書きするが如き事實が無いわけではないのである。けれども見逃してならないのは澎湃として起りつゝある國民主義運動である。

元來我々の祖先は國家の危機に際會するやヨク舊弊を一掃し國體の本義に立ち歸り以つて我々の祖國を守り育

てゝ來たのである。我々日本國民は此の貴い血を傳へ持つてゐるのである。此の血は、今や未曾有の國難に際し戦線の砲煙彈雨に洗禮され銃後の日増に加はる事變的重壓に鍛鍊され殊に愈々接迫する國際的危機に覺醒されて色々の形態の國民主義運動となつてムズムズと動き出し乃至動き出さうとしてゐるのである。之こそは日本の革新の動力因たるべきものである。

勿論現實に動き出してゐる所の乃至は動き出さうとしてゐる所の色々の形態の國民主義運動は、幾多の缺陷を持ち不純物を含んでゐるのであり、眞に有力なる純化されたる中心的指導的動力因が早く形成されてそれ等を純化し統御して眞に日本國民共同體的なる革新の動力因たらしめるのでなければ、うつかりしてゐると他に利用され乗ぜられる危険なしとしないのである。此の事を惟ふ時、殊に革新が兎角經濟的社會的混亂を伴ひ易いものであり其の革新が他ならぬ國際的危機の最中に於いて而も革新に關聯して起るべき社會的經濟的混亂に乗ぜんとし、て機を狙へる國を隣にして斷行されねばならぬものである事を省みる時、有力なる純化されたる中心的指導的動力因の形成される日の一口も早からんことを吾人は切望せざるを得ないのである。勿論それが形成されるとしても抗戰的に動き出したる東亞諸民族の民族運動を一朝にして親日的なるものに轉ぜしめる事は出来ないであらうが、眞に日本國民共同體的なるものに日本が立ち歸る限り日本は、其の迫力を飛躍的に強化し得ると共に、歐米諸國の一向一背に狼狽するが如き事なく、たとへ歐米諸國が一團となつて干涉し來るが如き事あるとも斷乎として堂々とそれを排撃して、眞に打つべき敵を打ち得る筈であり、其の事の行はれる限りやがては東亞諸民族も翕然として日本に共鳴して立ち上り東亞從つて世界の新秩序の建設に協力する事になる筈である。聖戰目的の達成は斯くしてはじめて本當の軌道に乗るであらう。